

目釘について

飯山嘉昌

目釘とは

日本刀と刀装・刀装具は切っても切れない間柄のものです。なかでも鐔や目貫、小柄、筭等、拵に付する刀装具はさまざまあり、美術的価値も高く評価されています。

今回取り上げる「目釘」、特に非金属製のものには刀装具の括りには入らないものですが、もともとは太刀の目貫がふたつに分かれ、表面に出ている鉾頭と座金が打刀の目貫に、

図1 竹製目釘(上・拵用 下・白鞘用)

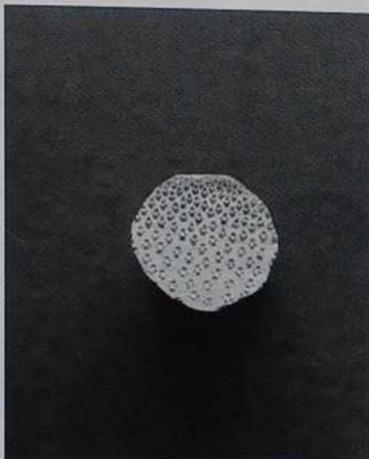


柄木のなかに差し込んであった根が目釘になったといわれています。「目貫の歴史」については、『刀剣美術』第六五六号(平成23年9月号)の拙稿をご覧ください。

目釘は刀身が柄から抜けないよう柄と中心に空けた孔に通す釘で、拵の目釘と白鞘の目釘では形状や材質も違ってきます。

拵の目釘は、刀身の中心孔にぴったりの太さで、先から頭までほぼ同じ太さです。

図2 竹目釘の繊維組織図(上が皮側)



負担が変わってきます。

図を交え申し述べますと、竹の繊維組織は図2のように皮側が密に、内側が粗になっています。

一般には、その密になって側を刀の中心孔の刃方に向けて打ち込みますが、柳生拵では竹の皮側を柄の縁側に向けて打ちます。柄の頭側に打った場合、強度が勝る皮側が先に折れてしまうので、粗の部分は耐えきれずに折れてしまいます。皮側の側面から力が加わった時は、最も目釘にかかる負担が少なくなるということとなります。

実際、刀を振り下ろした際に、目釘が折れて刀身が抜け飛んだという事故が過去に何件ありました。

また、白鞘に入れた刀は、柄を上を立てて置かないことがよい方法です。立てて置くと、刀身の重みは全

白鞘の目釘は、拵のものより細いうえに、頭から先に向かつてさらに二分の程度細くなります(図1)。

目釘の材料としては竹が一般的で、窪田清音(注1)は著書『刀装記』のなかで、「目釘は竹に限るべし」と述べています。他には銅・鉄などの金属のもの、象牙・角・鯨の髭、変わったところではナメクジや生皮等の動物性のもがあります。

白鞘にはどれを用いても構いませんが、刀身を納めた拵には実戦で使えるように真竹を用います。煤竹は刀身を納めない拵には見栄えもよく

窪田清音『刀装記』部分

(鑑刀集成・諸家秘説)

国立国会図書館ウェブサイトで転載

刀装記

○太刀之装ひ

一柄の長さは身の長短に准ずべきことなれども長き方扱ひに利あり大かた二尺五寸程ならんには柄は八寸五分程なるべし又九寸一尺にもすべし又長柄は二尺五寸の太刀に一尺二三寸或は一尺五寸にもすべし柄木の料はほうの木にかきるべしかたき木はなかこのそひこころあし、聊かゆるみたる時は柄鳴りつよし

一長つかの太刀は馬の時の妨げとなれば必ず露紐を付て置べし夫を口にくはへて乗かゝるべし露なき太刀には草のくけ紐を假に付べしこれは二ツわなにして頭の巻き止のきはにて留先を纏結ひにするなり二ツわなの

窪田清音

て目釘にかかってしまいます。すると、目釘は耐えきれずに折れて刀の切先は鞘に刺さってしまうという事故があるように聞いています。

どうしても立てて置く必要がある時は、太刀を太刀掛けに掛ける時のように、柄の頭部分を下にして立てましょう。

では、目釘の作り方について、拵用と白鞘用に分けて解説したいと思います。

拵用の目釘を作る

『刀装記』のなかで、材料については「目くぎは竹にかぎるべし竹は三五年を経たる南表の日向に生たる竹の土ぎはより三寸程上より一尺の間の日向の方を用ゆべし竹村の中に生たるは柔にして悪し、竹はいかにも太く厚きを撰ぶべし造り様は皮をうすく去り肉を取て竹のきはを丸く削り肉のかたをなき迄にすべし」と著者の窪田清音は述べています。

刀を腰に帯び、剣術が盛んで実際に使用していた時代の第一人者が述べていることでもあり、多くの方がバイブルとしている『刀装記』の記述ですから、その通りだと思えます。

目釘の材料としては、三〜五年物の太い真竹の、根に近い組織の密に

目釘の打ち方

窪田清音が、著書『刀装記』のなかで「うちかたは皮のかたを刃かたに向はせてうつべし皮のかた刃にあれば目直ちにたち横に力を受ける故もちよし」と目貫の打ち方を述べています。

これはどういうことかという、竹は皮側と内側では繊維組織の粗密が違い、その違いが強度に関係します。この強度の違いにより目釘への

「真竹」「孟宗竹」の特性比較表

部位	筍		枝	葉		稈(かん※)		
	時期	味		枝分かれ	外形	眉毛	結節	材質
真竹	5・6月	苦みがある	少ない	大	発達	二輪	密	20メートル
孟宗竹	3・4月	えぐ味がある	多い	小	貧弱	一輪	粗	25メートル

(保育社発行『カラーブックス236「竹とささ」』を参考に作表)

※稲や竹などの茎に見られる節間部が中空の節がある茎

真竹(和名・皮竹)の稈は、その材質から竹刀・弓・尺八・物差・建材に使われる

孟宗竹(和名・孟宗)の稈は、筆立・盆など強度の要らない細工に使われる

釘の頭の部分は丸く肉を付けるようにし木材に擦り付けて磨き、艶を出します(図4)。

刀身に打たれる先端部分は平らにし、少し細めにします(図5)。また、頭の部分は図のように柄の絞革面から出過ぎないようにします(図6)。

これは、目釘の頭が柄巻に当たると柄糸が擦り切れてしまいますから、それを避けるためです。

白鞘用の目釘を作る

材料としては拵用と同じく、三五年物の太い真竹の根に近い組織が密になった部分がよいでしょう(図7)。ほかに、角製のものもあります(図8)。

形としては、丸くした頭から先端に掛けては二分の一程細くします。拵の目釘とは異なるのは、頭と同様、先端も丸く肉を付けます(図9)。

竹製の白鞘用目釘も皮側の部分を片側全体に付けたいので、斜めに削り出します(図10)。

拵の目釘は道具を用いて叩き込みますが、白鞘の目釘は指で差し込むものですから、あまりきつくは作らず、抜く時に柄裏の出ている目釘先を親指で押せば飛び出るくらいがちょうどよい目釘だと思います。

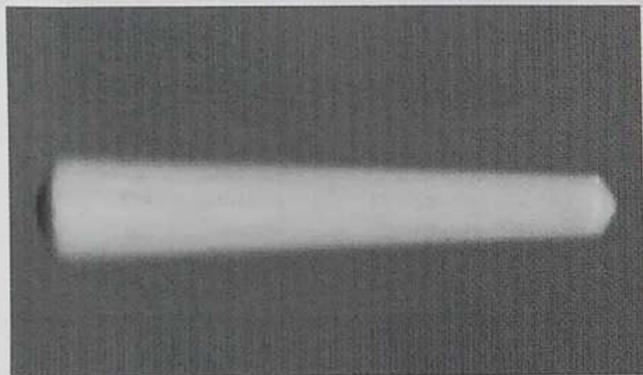


図8 角製



図7 竹製

以上、江戸時代の兵法第一人者である窪田清音の著書『刀装記』を参考にしながら、目釘について述べさせていただきます。

刀装(拵)が好きで、長年にわたり勉強してきましたが、最近では私と同世代の仲間たちの間では基礎知識であったことが忘れられてしまい、驚くことがあります。

目釘の知識もそのひとつでしたので、いま書いておかなくてはと思った次第です。

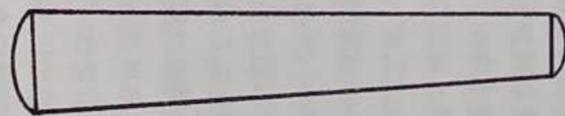


図9

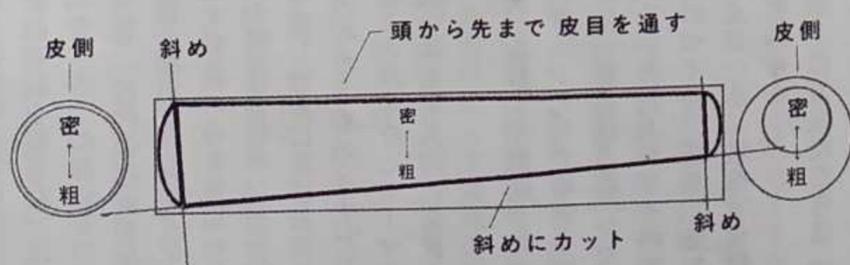


図10

〈追記〉
『刀装記』は、「国立国会図書館」ホームページで「窪田清音」『刀装記』を検索すると全文ご覧いただけます。
(いいやまよしまさ 刀装具研究家)

広く知られていることもあり、図などをご参照の上、少しでもお役に立てばと願うものです。

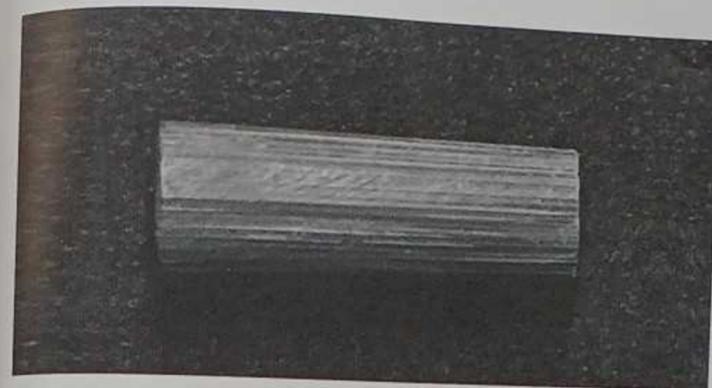


図4 目釘の頭部分 肉が付く

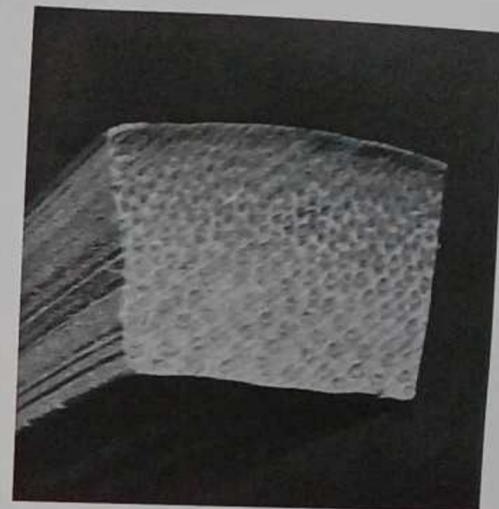


図3
上・素材の真竹(上部が皮)
左・正面が皮面である

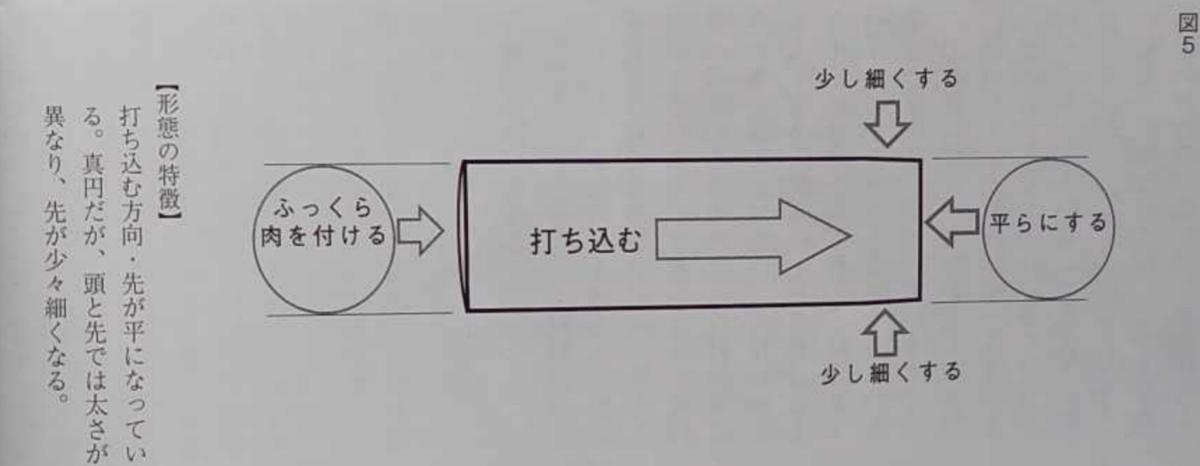


図5



なった部分を用いる、と書かれています。

竹には主に「真竹」「孟宗竹」「破竹」等があります。孟宗竹は真竹に比べ組織は粗なので、使用は避けた方がよいでしょう。また、煤竹はつなぎを納めた拵には見映えもよく現在も使われてはいますが、実際に刀を納める拵となりますと、性が抜けてしまっていますので使用は避けたい方がよいでしょう(「真竹」「孟宗竹」の特性比較表)。

図に沿って解説します。まずは、図3のように真竹を中心孔の大きさに併せて丸く削ります。そして、目

図6